

明倫短期大学学会報告

本学科における入学時基礎学力調査と 在学中の成績との関連

平澤明美（講師，歯科衛生士学科）

近年入試制度の変化や18歳人口の減少により，学力や入学動機など，多様な学生を受け入れざるを得ない状況の中，歯科衛生士学科で入学時基礎学力調査実施から3年が経過した．平成16年度入学生では本調査結果が，在学中または歯科衛生士試験結果に明らかな関係を持ち，平成17・18年度入学生ごとに基礎学力の低下がみられた．新潟工業短期大学の平成15年特色ある大学教育支援プログラムに採択された取組みを参考に，2年制最後の学年と3年制スタートの本年度，学力不足や学習意欲の減退に対して，基礎学力調査を今後どのように活用すべきかを考えた．

第22回（通算第105回）：2006年7月27日（木）

（座長：山田隆文）

マウスガードの機能評価

佐々木 聡（助手，歯科技工士学科）

ここ数年間のあいだにマウスガードが急速に普及してきている．コンタクトスポーツでのプレー中の衝突や転倒，ボールやゴールなどのスポーツ器具などとの接触・打撲によるスポーツ外傷が起こる可能性は十分にある．また，マウスガードを装着することにより，パフォーマンスの向上（重心動揺に関するバランスの向上など）や外傷予防の心理的効果によるプレーへの積極性も言われている．そこで今回野球におけるバットスイング，投球でマウスガードの装着前・後で測定を行い，比較検討し報告した．

少年犯罪と発達障害 —不可解な事件の背景にあるもの—

入山満恵子（講師，歯科衛生士学科専攻科）

近年，少年期の子どもたちが起こす凶悪犯罪が増加しているが，それらの子どもたちの何割かはいわゆる「発達障害」に該当するという調査結果が出ており，また事件後の精神鑑定結果もそのことを裏付けているものが多い．報道される事件は，その残酷性や特殊性に目を奪われてしまうことが多く，また事件を犯した者が未成年ということも手伝って，「どのような人物が，なぜそのような事件を引き起こしてしまったのか」という事実が報道されることはほとんどない．そこで，数年内に生じた

いくつかの事例を取り上げ検証した．同時にどのような支援が必要なのかということを，現在多くの発達障害の子どもたちをケアしている「ことばクリニック」の業務と関連付けて概説し，理解を求めた．

第23回（通算第106回）：2006年9月28日（木）

（座長：野村章子）

臨床実習における ヒヤリ・ハット事例と対策について

渡辺美幸（助手，歯科衛生士学科）

近年，医療現場で起こる重大な事故が社会的問題として取り上げられるようになり，その責任が問われる状況にあることから，ヒヤリ・ハットは教育の中にも位置づけられるようになった．1件の重大事故発生の背景には，数多くの軽傷事故やヒヤリ・ハットが存在しており，高頻度で起こるヒヤリ・ハットを減少させることで，重大事故を未然に防ぐことができると考えられる．各実習先でも医療事故防止対策がとられているが，本調査より日常診療の中に潜む多くのヒヤリ・ハット事例や医療事故に対する実習生の考えが明らかとなった．この結果を踏まえ，医療事故防止対策を再検討し，学生教育に役立てていきたい．

摂食嚥下リハビリテーション領域に おける言語聴覚士の法的責任と コンプライアンスについて

栗崎由貴子（講師，歯科衛生士学科専攻科）

高齢化社会をむかえ，摂食嚥下機能に対する国民の意識は高まりつつある．しかし，その一方で医療過誤の裁判例も増加してきており，摂食嚥下リハビリテーション領域の臨床現場では様々なジレンマが生じている．

言語聴覚士は，言語聴覚士法第42条で「医師又は歯科医師の指示の下，嚥下訓練を行う」と定められているが，実際は言語聴覚士が単独で侵襲性の高いアプローチを行っている施設も存在し，“補助業務”の範囲は未だ不透明である．そこで本会では，摂食嚥下リハビリテーション分野における医療行為と法的責任および言語聴覚士の業務内容を敷衍して述べ，この領域におけるリスク管理とコンプライアンスの重要性を明らかにした．